

## 【漢検教育実践賞】最優秀賞

### 漢字辞典を活用した効果的な漢字学習法の開発

京都 立命館小学校 教頭（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所） 深谷 圭助

---

#### はじめに

本校は、立命館大学の附属校において初めて設立する小学校として2006年4月に開校し、設置準備段階から、基礎学力形成を通して人格の陶冶をめざす方針のもとで、教育内容設計と教育方法設計に取り組んできた。この教育内容・方法設計において「計算力」育成と並んで重視されたのが、語彙力、特に「漢字力」育成であった。

漢字を読み書きする能力は、日本における初等教育が始まって以来、最も重視された能力であり、初等教育において最も中核的な教育内容であった。ところが、日本の授業研究の水準は高いと評されながらも、漢字指導法については、概して画一的であり、専ら徹底的な漢字の反復筆記と、努力主義の漢字学習によるところが大きかった。

こうした問題については、これまでさまざまな識者から指摘されている。

白川静（立命館大学名誉教授）は、

「消化されない今まで、ただ暗記せよというのであろうか。そのような無機的な記憶が、知識となりうるのであろうか。なによりもあてがわれただけで満足し、それ以外を余分のこととする教育が、人間を規格化することは確実である。」

（白川静『回思九十年』平凡社）

「漢字はその構造を理解することによって、記憶も容易となり、適確に使用することもできる。…（著者中略）…漢字の理解を、国民教育の場において一般化することが、私の切なる願いである。」

（宮下久夫『分ければ見つかる知ってる漢字』白川序文 太郎次郎社）

と暗記ではなく理解をさせる系統立った漢字教育の必要性を強調している。

本校は、こうした漢字の反復筆記一辺倒の指導方針と、徒に児童に努力を求める努力主義による漢字学習法を見直し、斬新で、しかもどの小学校、家庭においても効果的な漢字学習が可能になる方法論を開発することで、漢字教育の世界に新しい風を吹かせようと考えた。

本研究では、漢字の本質的な性質に則した指導を行うことで、効果的な指導が可能であることを立証することを目的とし、わが国のみならず、東アジア各国の漢字文化圏における学習メソッドとして広くその研究成果を公開していきたいと考えている。

#### 1.研究仮説

上述のように、これまでの漢字学習は、基本的に学習指導要領で定められた「学習漢字」を各学年に振り分けた「学年配当漢字」を教科書の新出漢字に従い、反復練習をしながら覚えていくプロセスで展開されていた。

新出漢字については、教科書に準拠したドリルを児童らに各自購入させ、書き順、読み方を教員が懇切丁寧に教え、児童は、宿題として漢字ノートに徒に反復筆記練習を課せられる。そして、小テストなどでその定着について確認をする。こうした指導がごく当たり前に行われていたといってよい。

しかし、それは、漢字のもつ本質的な構造を学ぶのではなく、たいして意味のない順番で学んでいたのであり、児童が漢字の文字そのものがもつ文字構造の意味に気付かせるものではなかった。つまり、前に学んだ漢字の学びを、次に学ぶ漢字の学びにつなげていくための見通しを持つ指導ではなかった。

漢字辞典は、部首毎に漢字が配列しており、一定の同じ構造を持つ漢字をまとめて学ぶのに適していると考えられる。そこで、研究仮説として、漢字を一定の同じ構造や意味を持つ漢字のグループでまとめて学習させるために漢字辞典を用いることで、効果的に学ぶことができるとともに、漢字に興味を持って学ぶことができるのではないかと考えた。

## 2.研究の方法

上記の研究仮説を実証するために、漢字辞典を日常的に活用する習慣を習得させ、漢字学習の教材として用いる際に、引いた箇所に付箋を貼るようにさせた。付箋が増えることで子どもの漢字学習への意欲が高まったかどうか検証することができる。

漢字辞典は、部首索引、音訓索引、総画索引の3つのアプローチから漢字を引くことができるものであるが、多くの場合、部首別に漢字が配列されているために、同じ「へん」「つくり」の漢字を一度に学ぶことができる。すなわち、似た意味や概念を持つ漢字を一度にまとめて覚えることができる。漢字辞典を活用して学ぶことの意義はまさにここにある。漢字辞典を用いて学ぶことで、漢字を系統的に学ぶことができる。

辞典を日常的に活用することで子どもの語彙力を向上させ、言葉への関心を高めるとともに、自ら学ぶ態度を身につけさせる教育手法である「辞書引き学習法」は、すでに、拙著『小学1年生から国語辞典を使うようにする30の方法』(明治図書、1997年)で公表しており、続編の『7歳から辞書を引いて頭を鍛える』(すばる舎、2006年)などでもよく知られるところである。

しかし、漢字を習い始める小学校1年生から漢字辞典を活用させる実践は、管見の限りこれまでほとんど実践例はない。そこで、国語辞典の活用法としての「辞書引き学習法」の指導原理を下敷きとしながら、漢字辞典を日常的に活用させる方法を工夫し、漢字を効果的に学習するとともに、漢字を学ぶことへの意欲を高める指導を展開したいと考えた。

漢字辞典を日常的に活用した学習を展開するために考えた方策は以下の通りである。

- (1)「漢字辞典」を日常的に引く環境を整えるとともに、積極的に「漢字辞典」を引くきっかけを与えるようにする
- (2)毎週1時間、「漢字の時間」を特設し、漢字の構造を学んだり、漢字を学ぶことのおもしろさを実感する時間を設定し、そのための「ドリル」を開発する。なお、このドリルは、「漢字辞典」を活用して学ぶようにする。

こうしたことに関しては、学校の国語を指導する専科教員、担任教員はもちろんのこと、全教員に共通の課題意識を持つように働きかけ、それぞれが漢字指導については創意工夫し、効果的と思われる指導は共有化するように努めた。

### 3.研究実践

#### (1) 漢字辞典に日常的に親しみ、積極的に漢字辞典を引くきっかけとしての「付箋」の活用



資料1 常時、机の上に漢字辞典と国語辞典を置いて学習する1年生児童



資料2 累々と積まれている小学校2年生の辞典類

小学校低学年の子どもにとって魅力的な活動として、「モノを集める」活動を挙げることができる。モノを集める行為は、7歳～8歳の子どもたちにとって魅力的な活動である。

子どもたちが、シールやカードを集めることを好むのは、「集める」という行為が魅力的であることを物語っていると考えられる。「これだけ集めた」という証が、子どもの活動に対する意欲を高め、継続させていくのである。そこで、漢字辞典に日常的に親しみ、積極的に漢字辞典を引ききっかけとして、付箋を引いたページに貼りながら、辞典を引かせることにした。

1年生の5月に国語辞典を、そして漢字を習い始める7月から漢字辞典を与え、それを日常的に読むことを1年生児童に薦めた。その際に、読んだページに、読んだ言葉や漢字を付箋に書いて貼るようにさせた。子どもたちは、付箋を辞典につけることに喜びを見出し、辞典を開いて読むようになり、読んだ箇所に付箋を貼るようになった。

付箋に書かれた言葉や漢字は、必ずしも正確な文字ではないが、この指導法においては、子どもが自ら学ぶ態度を評価することが重要となる。子どもは、辞典を引いて、自分の力で漢字を学んだことに満足をしており、多くの場合、漢字を正確に書くことができたかどうかに関心を持っていない。子どもが評価して欲しいところを教師は評価することが重要である。評価の仕方を間違えれば、子どもの学びは継続的に展開されることはない。

指導する教員は、誤字の指導や矯正に奔走するのではなく、子どもが漢字辞典を開いて読んだ箇所に付箋をつけ、その言葉を付箋に書く行為そのものを褒めるようにした。その結果、2ヶ月後には、付箋の数が2000枚を超えるようになり、漢字辞典はその原型を留めないほどになった(資料1、2参照)。

漢字辞典に日常的に親しむためには、身近なところに辞典をおいて、すぐに使えるようにすることが大切である。子どもたちをめぐる言語環境を考えれば、常に漢字を含む文字が日常の中に存在していると考えることができる。したがって、いつも漢字辞典を引くことができる環境を保証することは重要なのである。子どもたちの身の回りの出来事やモノを漢字でどのように表現するのか、生活の中で子どもたちが見つける「漢字」の数々をどう読むのか、どのような意味があるのかを辞典で解き明かすのは、子どもたちにとっての関心事なのである。子どもたちの関心に基づいて辞典を引く習慣を身につけていくためには、常に身近に辞典を置くことは何よりも重要なのである。

## (2) 多様な辞典の活用による語彙力・漢字力の拡充

子どもには、同じ言葉や文字でも、辞典によってさまざまな解釈があることに気づかせるために、様々な種類の国語辞典、漢字辞典を活用させている(資料3参照)。

漢字を調べる場合、漢字辞典の音訓索引で調べる場合もあるが、国語辞典で調べることも可能である。また、国語辞典を用いることで、同じ読み方でも異なる漢字を使う同音異義語についての学習をすることができる。

小学校1年生の児童は、文字を漢字に変換することを好む傾向がある。子どもたちは、国語辞典や漢字辞典を活用しながら漢字学習に取り組むようになった。また、その言葉の意味は、国語辞典により、また漢字辞典により、異なる意味づけが与えられている。さまざまな種類の国語辞典、漢字辞典を用いる意義はまさにそこにある。比較検討しながら、言葉や文字、漢字を学ぶことで、子どもは、多様なアプローチで言葉を学ぶ構えが身についていった

のである。



資料3 様々な種類の辞典を使いこなす。同じ言葉を多様な角度から検討する。

### (3) 漢字の構造を学んだり、漢字を学ぶことのおもしろさを実感させる時間としての「漢字の時間」の特設

漢字学習を形式的にしている背景の一つに、漢字指導をする時間が確保できていないという点があげられる。

小学校の低学年においては、国語の授業時数が1年生272時間、2年生280時間と比較的確保されているが、3、4年生各235時間、5年生180時間、6年生175時間と、学年が上がるにしたがって国語の年間授業時間が減少している。このことにより、漢字指導に十分に時間がかけられないという問題点が浮かび上がってくる。

こうした漢字指導の時間不足の問題を克服するために、すべての学年で週1時間、年間35時間、「漢字の時間」として漢字を系統的に教え、漢字に対する興味・関心を高める指導をする時間を確保するカリキュラムを設定した。

「漢字の時間」では、漢字の「部首」を学び、漢字がどのような普遍的な構成原理で形成されているのかを、漢字辞典や自作教材を用いて学習する。

たとえば、人の体と関係のある漢字は「にくづき」を用いる場合が多いとか、植物にかかりのある漢字は「きへん」や「くさかんむり」「たけかんむり」のつく漢字が多いこと、「しんにゅう(しんにょう)」は「道」に関わりのある語義があることに気づくようになる。「さんずい」は「水」と関わりのある語義があることに気づくようになる。子どもたちに漢字を普遍的に解釈する視点を与えるのである。

また、漢字の読み方については、同じ部位を持つ漢字が同じ読み方をすることがあるのを指導する。たとえば、漢字辞典の音訓索引で「キ」と読む言葉を探すと、「記」「紀」「起」「忌」のように同じ部位を持つことで、同じ読み方をする漢字があることに気づくようになる。

特殊な読み方をする漢字(和語)は、フラッシュカードや電子情報ボードに提示される漢

字を読みすすめていく方法で指導する。

たとえば、「豆」を学ぶ際に、「大豆(だいすき)」「小豆(あずき)」を関連づけて学ぶようにしたり、「瓜」を学ぶ際に「西瓜(すいか)」「南瓜(かぼちゃ)」を関連づけて学ぶようにしている。このように、漢字のフラッシュカードや電子情報ボードを用いて、まず特殊な読み方をする漢字を覚えさせるようにし、特殊な読み方をする漢字は、その由来やその意味づけについて特殊な位置づけとして教えていくようにする。大豆や小豆も「大きい豆」が「だいすき」、「小さい豆」が「あずき」という意味づけで子どもにとって「腑に落ちる」学習となりうるのである。このように、漢字の部首を手がかりに、その意味を解釈したり、ある部位を手がかりに漢字を読んだりする力を習得するようになる。漢字辞典を活用することにより、漢字の構造を学び、漢字の構成原理を学ぶことで新たな漢字を学ぶ際に、それまでに学んだ解釈する枠組みが生かされることになり、漢字を学ぶことのおもしろさを実感できるのである(資料5参照)。

もちろん、こうした学習を展開するためには、その言葉とつながる生活体験が豊かでなくてはならない。言葉は、人をめぐる風土や文化の礎の上につくられるものである。したがって、生活の中で触れる言葉を日常的に検討する機会を設けることは大切である。国語辞典の日常的な活用は、こうした意義も有しているのである。これまでに学んだことが、その後の学びに生かされていく、こうした、学ぶことの喜びを日常の中で感じた子どもは自ら学ぶ意欲をもつようになる。



資料4 自作ドリルを用いて漢字を辞書で調べて意欲的に学ぶ1年生の子どもたち

漢字の構造を学ぶというコンセプトをもとに開発し、市販化されているのが、『辞書引き学習自学ドリル』シリーズ(MCプレス)である。2007年9月現在2冊の漢字辞典編が出版されており、2007年10月には、国語辞典編が刊行される予定である(資料5参照)。このシリーズは、漢字指導法に関する教材とその指導マニュアルが2冊の分冊となっていて、立命館小学校で展開されている漢字教育法のエッセンスが公開されている。



資料5 辞典を活用して語彙力・漢字力を育てるために開発された『辞書引き学習自学ドリル』

#### 4.研究成果の検証

研究仮説は次の通りであった。

漢字を一定の同じ構造や意味を持つ漢字のグループでまとめて学習させるために漢字辞典を用いることで、効果的に学ぶことができるとともに、漢字に興味を持って学ぶことができるのではないか。

本校では、国語辞典、漢字辞典をそれぞれの学年で活用させているが、2、3年生の児童はもとより、1年生の児童が最も頻繁に辞典を使う傾向が見られた。小学校低学年の児童は、文字(かな文字、漢字)に対する関心が極めて高い。この時期の子どもは、むずかしい文字を読んだり、書いたりすることを好む傾向がある。従って、児童が漢字辞典、国語辞典を常に机上に置き、いつでも学べるような環境をつくれば、興味をもって辞書を引いたり、辞書を読むようになるのである。このことにより、漢字辞典が部首別に構成されていることに自然に気づくようになり、漢字のもつ構造に対して興味をもつ素地ができる。

漢字辞典が、部首毎に漢字を配列していることから、子どもたちは、同じ部首の漢字には、似た意味があることに気づくようになっていった。同じ部首の漢字をまとめて覚えたり、「しかばね」「おおがい」など、通常、小学校1年生や2年生では習わない漢字の部首を先に覚え、初めて出会う漢字の部首を読みとり、自分からすんで漢字辞典を引いて、その漢字の読みや意味を探すようになった。

また、こうした漢字辞典の構造に則した、「漢字の時間」における教材、すなわち、漢字の部首ごとにさまざまな漢字に出会わせる授業、ワークシート、テキストに取り組ませることで、意欲的に漢字辞典を引こうとする態度を育てることができた。こうした主体的な学習態度が、漢字学習への意欲的な取り組みの基礎となり、漢字能力検定全員受検、全員合格の礎となっていた。漢字検定1ヶ月前から、緻密な漢字学習を展開していくわけであるが、漢字学習に

対する自尊感情が高い子どもたちの熱気は、学校全体を緊張感のある雰囲気にしていた。漢字検定受検日、体調の優れない子どもたちや家庭の都合で休まなければならなかっ子どもたちも、ぜひ受検をしたいという強い意志を表し、全員受検することができた。

こうした意志は、日頃からの漢字学習に対する高い関心ゆえのものであったと考えられる。そして、全員合格という結果が、子どもの漢字学習への自信と意欲を更に向上させることとなった。このように、辞典を活用した漢字の部首等の構造に着目した漢字学習法は子どもの学ぶ意欲を高めるとともに、効果的な学習法であり、新しい漢字学習のあり方として新しい風を吹かせることができたと考える。

## 5.おわりに

本校の国語辞典・漢字辞典を活用した漢字学習法は、これまでの小学校児童の発達観をくつがえすものである。すなわち、国語辞典や漢字辞典の指導を1年生から行うことは従来考えられなかっことであった。しかし、1年生の段階から、漢字を学習する学び方として、辞典を与えることは、一見効果的にみえるドリル学習による受動的な学習態度とは異なる、主体的な学習態度を育てることになった。

また、学年別配当漢字と教科書における新出漢字の順に支配された漢字学習の枠組みとは異なる枠組みを提示した。こうした試みは、NHKや民放の報道番組、新聞文化欄で紹介されて注目されるとともに、全国に大きな影響を与え、国語辞典・漢字辞典の売り上げが大きく伸びている。これは、本校の漢字教育の考え方方が広く受け止められた結果であると考えられる。

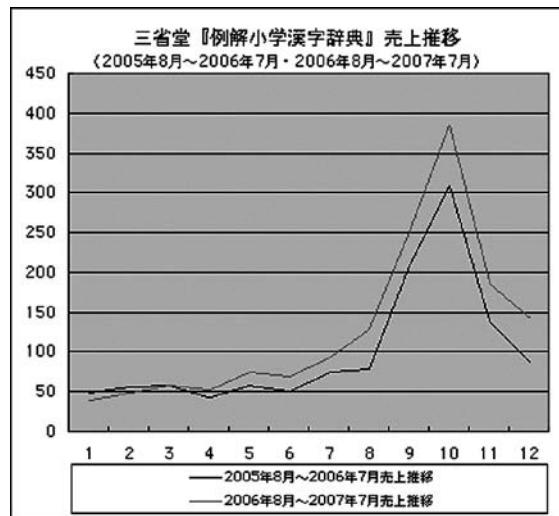
例えば、資料5のグラフは、立命館小学校で小1から小3まで使用した三省堂『例解小学漢字辞典』の売上推移を示すグラフである。下の線が、立命館小学校開校前の8月から開校1年目の7月までの売上推移を示しており、上の線が開校1年目の8月から開校2年目の7月までの同時期の辞書売上推移を示している。このグラフにより、同時期の漢字辞典売上の比較ができるようになっている。後者の線が前者の線を上回っている。立命館小学校の漢字教育実践の成果がマスコミを通じて公開されることにより、漢字辞典の売上が伸びている様子が分かる。

資料6は、ベネッセ『小学国語辞典』の売上推移であるが、漢字辞典の売上推移と同様に、立命館小学校開校から1年を経て、前年度よりもかなり売上が伸張していることがわかる。このことは、本校の漢字教育法への評価と期待のあらわれであると考えられる。

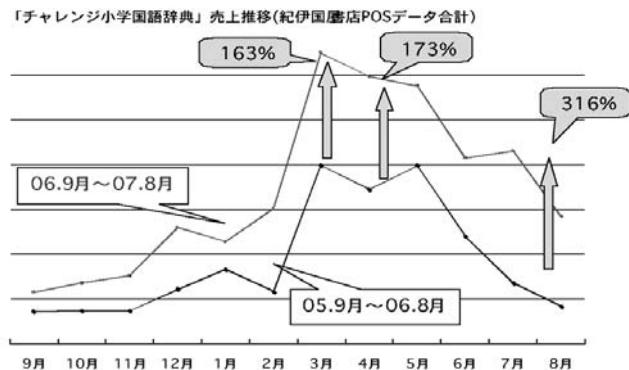
このように、本校の国語辞典・漢字辞典を活用した学習法の開発は、近年の学力低下問題や若者の言葉の力の低下の問題に対する、ひとつの解決策として、社会から脚光を浴びるようになった<sup>1</sup>。

---

1 朝日新聞（2007年7月12日朝刊）や週刊文春（2007年9月27日号）では、立命館小学校の開設以来、辞典売上推移に「異変」が生じていることを取り上げている。



資料5 『例解小学漢字辞典』(三省堂) 売上推移



資料6 『チャレンジ小学国語辞典』(ベネッセコーポレーション) 売上推移

さらに、新しい漢字教育メソッドを開発し、その効果について検証して、社会に発信したい。そして、東洋文字文化としての漢字教育の国際交流をさらに積極的にすすめていきたい<sup>2</sup>。

2 すでに、National Taichung University of Education (国立台中教育大学)のGrace Guey-Shya Chen 准教授は、本校の漢字教育を視察しており、漢字教育に関する共同研究に取り組んでいくことを合意している。